

ペット葬儀社隆盛の一方で

動物虐待をめぐるニュースが相次いでいるが、その一方で死んでしまったペットのために人の場合と負けず劣らず豪華な葬儀をする人が急増している。「家族同然」のペットの死を多額の費用をかけて悼む人々の姿には、矢がモフイーバー同様、モノ言わぬ動物に過剰な思い入れを寄せる現代人の心の風景も浮かぶことができた。

最近の世論調査によると、ペットを飼っている家庭は約三軒に一軒。犬や猫だけでも、推定で約千三百万匹が飼われていると言われている。こうした中で、ペット用品などのペット産業も、いまや五千億円産業といわれている。そのうち、ここ数年で急速に伸びているのが、葬儀や火葬、納骨、供養を一括して行うペット専門の葬儀会社である。

東京都内やその近郊を営業エリアとする犬友社（本社・東京都港区芝浦）の場合、五年前に設立された当時は月に数件の注文がせいぜいだったが、現在では二百件を超える。しかも、最初は料金の安い簡単な葬儀が主流だったが、今では遺骨を安置する霊壇だけでも百万円といったような豪華な葬儀を

希望する人も少なくない。同社の佐藤貴之さんは「飼い主にとってペットは家族も同様でしょうから、動物とは言っても人並みの葬儀をしてあげたいと思うのは当然かもしれません。犬や猫、うさぎを中心に現在までに千二百体を預かっています」。

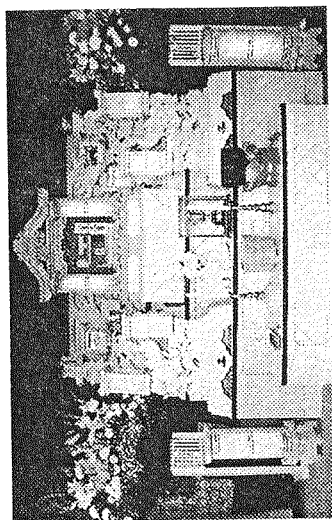
犬友社のような会社はここ数年で急増し、都内だけでも十社を超える。その理由について、佐藤さんは「住宅事情も大きな原因。以前は自宅の庭などに埋めて供養することができたのですが、今ではマンションなどの集合住宅に住む人が多く、自分で供養したいと思ってもできない」とみる。

こうした豪華な葬儀とはうらはらに、今日のペット・ブームの背後には動物虐待の現実も潜んでいる。財団法人・日本動物愛護協会の会田保彦さんは「現在でも年に七十数万の犬や猫が、安楽死処分されています。大きくなってマンションの中で飼えなくなったからとか、独身の間は寂しさをまぎらすために飼っていたけど、結婚を機に邪魔になったなど、飼い主の身勝手な理由で捨てられた動物たちなんです」と語る。

同協会には、ペットの葬儀や飼えなくなったペットの取り扱いなどに関する相談が、月に約二十件は寄せられるという。会田さんは「核家族化が進んで、ペットが死んで初めて身近に死を意識する人も多い。ペットの死が生命の貴さを考えるいい機会となっているわけです。動物も人間も生命の大切さに変わりはないはず」と言う。

豪華な葬儀もまた、ペット遺棄と表裏一体の人間側の身勝手さの現れでなければいいのだが……。

生命の貴さ 動物も同じ



豪華なペットの葬壇